

動詞敬語表現に対する印象の分析

丸元 聡子^{*1}, 白土 保^{*2}, 井佐原 均^{*2}

^{*1}計量計画研究所, ^{*2}通信総合研究所

smarumoto@ibs.or.jp

1. はじめに

日本語においては、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、名詞、代名詞などほぼ全ての品詞にわたり敬語表現に関するいろいろな語が存在する。特に動詞に関する敬語表現には以下に述べる様々な表現があり、これほどの多様性は他の品詞には見られない。動詞に関する敬語表現には大きく分けて次の4つのタイプがある。1)「ゴ説明する」や「オ話しになる」などのように接頭辞と動詞と補助動詞を組み合わせるもの、2)「おっしゃる」と「申す」(いずれも常体は「言う」)などのように動詞自体を交替させるもの、3)「話しテ頂く」「話しテ下さる」「話しテあげる」などのように助詞テを介して補助動詞が繋がるもの、4)「マス」「レル」「ラレル」などの助詞・助動詞を動詞と組み合わせるものである。これらの中でも1つ目のタイプ(以下、本稿では「ゴ+漢語動詞+補助動詞」を“ゴ~型”、「オ+和語動詞+補助動詞」を“オ~型”と呼ぶ)は、同じ本動詞を用いた場合でも、その本動詞と補助動詞との組み合わせによって尊敬語になる場合と謙讓語になる場合がある、という特徴を持つ。

このような背景の下に行った我々の先行研究において、敬語表現としての自然さの印象に関してゴ~型の表現とオ~型の表現の間に違いがあることが示唆された。そしてその原因として、敬語表現としての認識の複雑さに関する両者の違いが示唆された[1]。これが本質的なものならば、敬語表現としての自然さの印象だけでなく、敬語表現に関する他のさまざまな印象の違いとしても観測できることが示唆される。このため、我々はそれに引き続く研究において敬語表現の丁寧さ、および改まりの程度の印象に関するゴ~型の表現とオ~型の表現の違いについて定量的に分析した[2]。その結果、ゴ~型の表現はオ~型の表現に比べ、常体を敬語表現に変化させた場合の丁寧さ、および改まりの程度の変化量が小さかった。この現象は、接頭辞と後続の語の一体感に関するゴ~型の表現とオ~型の表現との差異に起因することが示唆された。

本研究では、前回の研究[2]と同じデータを用いて、丁寧さの観点からゴ~型の表現とオ~型の表現の差異について検討する。但し、前回の研究が両者の間の平均的な値の比較をしていたのに

対し、今回はそれぞれにおける値のばらつき(不偏分散)の比較を行う。さらに、前回の研究が全被験者に関する値の検討であったのに対し、今回は被験者属性に関する検討を行う。

2. 敬語表現のパターン

実験に用いた敬語表現のパターンを表1に示す。表1の謙讓語と尊敬語のパターンはゴ~型、およびオ~型の主な表現パターンである[3][4]。

表1 実験に用いる敬語表現のパターン

種類	パターン
謙讓語	ゴ/オ~する ゴ/オ~します ゴ/オ~できる ゴ/オ~できます ゴ/オ~致します ゴ/オ~申し上げます ゴ/オ~申し上げます ゴ/オ~頂く ゴ/オ~頂きます
尊敬語	~れる、~られる、~される ~なさる ゴ/オ~なさる ゴ/オ~なさいます ゴ/オ~になる ゴ/オ~になります ゴ/オ~下さる ゴ/オ~下さいます ゴ/オ~になられる<二重敬語>
丁寧語	~ます
常体	~

表1の「~」の部分は各パターンと組み合わせられる動詞、すなわち、ゴ~型のパターンでは漢語動詞、オ~型のパターンでは和語動詞である。また丁寧語「~マス」のパターンでは漢語動詞、和語動詞の両方である。なお、本稿では、漢語動詞とはサ変動詞を指し、和語動詞とは和語動詞の終止形もしくは連用形を指すものとする。

3. 実験

3.1 実験刺激

本実験では、複数の発話意図を用意することにより、ゴ~型の表現とオ~型の表現の違いに関する普遍的な傾向を調べる。具体的な発話意図とし

ては、その発話意図に対応した漢語動詞と和語動詞が両方とも存在し、かつ表1のパターンと組み合わせることが可能なものを5種類設定した(表2)。なお、表2左端には各発話意図にほぼ対応する概念を表す英単語を示した。

表2 発話意図とそれに対応する動詞

発話意図	和語動詞	漢語動詞
<i>answer</i>	答える	回答する
<i>use</i>	使う	使用する
<i>explain</i>	話す	説明する
<i>inform</i>	知らせる	連絡する
<i>invite</i>	招く	招待する

実験では、表2に示した各発話意図における漢語動詞、和語動詞のそれぞれに対して、表1における謙讓語パターン、丁寧語パターン、常体パターン、および表1における尊敬語パターン、丁寧語パターン、常体パターンを組み合わせ、2つの刺激グループを作った(それぞれ、謙讓語グループ、尊敬語グループと呼ぶ)。このように刺激グループを謙讓語グループと尊敬語グループに分けた理由は、発話意図が同じ場合でも、謙讓語と尊敬語では行為主体が異なる(例えば、謙讓語:「(私が)お答えする」、尊敬語:「(先生が)お答えなさる」)ので直接的な比較が困難であるためである。ただし、常体および丁寧語は、謙讓語および尊敬語と比較することが可能であるため、両方のグループに入れた。

以上のようにして作った刺激表現グループの例を表3.1(発話意図: *answer*、謙讓語グループ)、表3.2(発話意図: *answer*、尊敬語グループ)に示す。各表におけるNo.は、その表現グループの中での通し番号である。表3.1ではNo.1とNo.12が常体、No.2とNo.13が丁寧語、No.3~No.11とNo.14~No.22が謙讓語であり、表3.2では、No.1とNo.10が常体、No.2とNo.11が丁寧語、No.3~No.11とNo.14~No.22が尊敬語である。

表の左側の列が和語動詞に起因する表現(以下では、“オ~型系表現”と呼ぶ)であり、右側の列が漢語動詞に起因する表現(以下では、“ゴ~型系表現”と呼ぶ)である。なお、オ~型系表現のうち、No.3~11だけを指す場合を“オ~型表現”、ゴ~型系表現のうち、No.14~22だけを指す場合を“ゴ~型表現”と呼ぶ。

これと同様に、発話意図: *use*、*explain*、*inform* および *invite* に対しても刺激表現グループを作った。以上のように、本実験では発話意図5種類×謙讓語/尊敬語の2種類=計10種類の表現グループを作った。

表3.1 発話意図: *answer*、謙讓語グループ

No	オ~型系表現	No	ゴ~型系表現
1	答える(常体)	12	回答する(常体)
2	答えます(丁寧語)	13	回答します(丁寧語)
3	お答えする	14	ご回答する
4	お答えします	15	ご回答します
5	お答えできる	16	ご回答できる
6	お答えできます	17	ご回答できます
7	お答え致します	18	ご回答致します
8	お答え申し上げます	19	ご回答申し上げます
9	お答え申し上げます	20	ご回答申し上げます
10	お答え頂く	21	ご回答頂く
11	お答え頂きます	22	ご回答頂きます

表3.2 発話意図: *answer*、尊敬語グループ

No	オ~型系表現	No	ゴ~型系表現
1	答える(常体)	12	回答する(常体)
2	答えます(丁寧語)	13	回答します(丁寧語)
3	答えられる	14	回答される
4	答えなさる	15	回答なさる
5	お答えなさる	16	ご回答なさる
6	お答えなさいます	17	ご回答なさいます
7	お答えになる	18	ご回答になる
8	お答えになります	19	ご回答になります
9	お答え下さる	20	ご回答下さる
10	お答え下さいます	21	ご回答下さいます
11	お答えになられる	22	ご回答になられる

3.2 実験手続き

実験には関東在住の80名の被験者が参加した。被験者は年齢層(Y(ounger)/E(lder))、および性別(M(ale)/F(emale))が異なる4つの被験者グループから構成される(各グループ20名)。それぞれの被験者グループを、YM、YF、EM、およびEFと記す。

若年層の年齢は、30歳未満かつ下限の年齢を20歳とし、低年齢の被験者を避けた。この理由は、低年齢の被験者は敬語学習の機会が少ないため、敬語表現の詳細な区別が困難であることが予測されるからである。また、年長層の年齢は40歳以上に設定した。

実験では、前述した10種類の表現グループそれぞれにおいて、グループ内の各表現に対する丁寧さの印象をScheffeの一対比較法、中屋の変法[5]によって定量化した。被験者には一対ずつ提示された表現の間で丁寧さの程度を比較し、回答するよう指示した。

4. 定量化値

被験者グループYMにおける平均的な被験者の、各表現グループにおける各表現*i*の丁寧さを定量化した値を μ_{Yi} と記す。被験者グループYF、EM、EFに対して、同様に定量化した値を、それぞれ μ

μ_{YF} 、 μ_{EM} 、 μ_{EF} と記す。

さらに、全被験者における平均的な被験者の、各表現グループにおける各表現*i*の丁寧さを定量化した値を μ_{ALLi} と記す。

5. 考察

5.1 被験者グループ間の比較

被験者グループYMにおける各表現グループにおいて、 μ_{YM} の表現*i*にわたる不偏分散を求めた(s_{YM}^2)。他のグループYF、EM、EFに対しても同様に不偏分散を求めた(s_{YF}^2 、 s_{EM}^2 、 s_{EF}^2)。

不偏分散 s^2 の値は、表現間を区別する程度の大きさに対応していると考えられる。従って、 s_{YM}^2 、 s_{YF}^2 、 s_{EM}^2 、 s_{EF}^2 を比較することにより、表現の間の区別の程度に関して、被験者グループYM、YF、EM、EFを比較することができると考えられる。

以上の計算を全ての表現グループについて行った結果、10個の表現グループのうち、6個の表現グループで、 $s_{EF}^2 > s_{YF}^2 > s_{EM}^2 > s_{YM}^2$ となった。この他の4個の表現グループでは、 $s_{YF}^2 > s_{EF}^2 > s_{EM}^2 > s_{YM}^2$ となった。このことは、年齢によらず男性より女性の方が、また、概して、性別によらず若年層より年長層の方が、敬語表現をより区別しているということを示唆する。

年齢層への依存性が見られた理由としては、年齢による敬語学習量の差(すなわち、概してより高い年齢層の方が敬語学習量が多い)が考えられる。また、性別への依存性が見られた理由を明確にするためには、性役割(gender)等の観点からの調査が必要と考えられる。

なお、以上の、年齢によらず男性より女性の方が、また、概して、性別によらず若年層より年長層の方が、敬語表現をより区別している、という特徴は、敬語表現の自然さに関する研究[1]における規範的表現と誤用表現の区別の大きさに関する結果とほぼ一致する。

5.2 オ～型表現とゴ～型表現の比較

各表現グループにおいて、 μ_{ALLi} の全てのゴ～型系表現にわたる不偏分散($s_{ALL}^2(\text{ゴ})$)および、全てのオ～型系表現にわたる不偏分散($s_{ALL}^2(\text{オ})$)をそれぞれ求めた。

以上の計算を全ての表現グループについて行った結果、10種類全ての表現グループで、 $s_{ALL}^2(\text{オ}) > s_{ALL}^2(\text{ゴ})$ となった。このことは、オ～型系表現に比べ、ゴ～型系表現は、敬語表現をより区別していないことを示唆する。

しかし、この結果は、常体とそれ以外の表現の間での定量化値の違いを反映しているだけに過ぎない恐れがある([2]参照)。

これを調べるために、常体および丁寧語を除い

て、先と同様の計算を行った(各表現の μ_{ALLi} の値は一对比較データのうち、常体および丁寧語を除いたデータを用いて再計算した)。

その結果、10個の表現グループのうち8個の表現グループで、 $s_{ALL}^2(\text{オ}) > s_{ALL}^2(\text{ゴ})$ となった。このことは、概して、オ～型表現に比べ、ゴ～型表現は、敬語表現をより区別していないことを示唆する。この理由としては、接頭辞と後続の語との一体感による解釈が可能である。すなわち、ゴ～型表現の方が接頭辞と本動詞の一体感が強いいため、常体に接頭辞が付いて敬語表現になったことへの印象がオ～型表現に比べて弱く、補助動詞に関する意識、つまり、各敬語表現に対する区別が弱まったと考えられる。

先行研究[1]で、敬語表現に関する自然さにおいても、オ～型表現とゴ～型表現の違いがあった。この差異に関して、接頭辞と後続の語との一体感という説明が可能である。以上から、敬語表現におけるオ～型表現とゴ～型表現の間には、一体感の違いに起因した心理的印象の違いが生じていると考えられる。

6. おわりに

先行研究[2]からの追検討として、動詞敬語表現に対する丁寧さの印象に関し、ゴ～型表現(「ゴ+漢語動詞+補助動詞」とオ～型表現(「オ+和語動詞+補助動詞」)の違いについて、定量的に調べた。

その結果、1)敬語表現間の区別の大きさが年齢層や性別に依存すること、2)オ～型表現に比べてゴ～型表現は敬語表現を区別しておらず、これは、接頭辞と本動詞の一体感の違いに起因すること、が示唆された。

ゴ～型表現とオ～型表現の間でのこのような違いは従来の言語学的研究では殆ど指摘されていなかったものである。

今後は、会話文における敬語表現の検討を行うことで、今回のオ～型表現とゴ～型表現の違いに関する結果が、より実用的な場面でも妥当であることを調べられると考えている。

文献

- [1]白土保, 丸元聡子, 井佐原均, 敬語に対する認識の混乱に関する定量的分析, 『計量国語学』, 2003.
- [2]丸元聡子, 白土保, 井佐原均, 敬語形式の違いに対する印象の統計的分析, 言語処理学会第9回年次大会発表論文集, 2003
- [3]林四郎, 南不二男編集, 『敬語講座 1 敬語の体系』, 明治書院, 1974.
- [4]菊池康人, 『敬語』, 講談社, 1997.
- [5]三浦新他編, 『官能検査ハンドブック』, 日科技連, 1973.